

経済学史・社会思想史研究文献解説

——T.モアからJ.S.ミルまで——

長 島 伸 一

わが国における書誌の蓄積は、経済学説史や社会思想史の分野に限っても相当な量にのぼる。ここでは、文献目録、文献解説に留まらず、研究動向(学界展望)や外国経済学導入史研究などの研究文献をも含めて、主として戦後発表された書誌類の解説を行なう。ただし、これを網羅的に行なうことは現在のところ不可能なので、あらかじめ次のような限定をつけざるをえない。(1)年表・年譜、大学付属図書館の所蔵目録、記念展示目録などは特定のものを除きその収録対象からはずした。(2)研究動向とされているものは解説の中でふれるに留めた。(3)邦訳書巻末の書目はおおむね略した。

以下では、Ⅰ.主題書誌解説Ⅱ.人物書誌解説にわけ、前者はテーマの内容によりほぼ年代順に配列し、後者は対象となっている人物の生年順に配列してある。文献目録のうち改訂版の出されているものは最新の版を示し、旧版は解説の中でふれる。収録期間の下限は1982年、文中敬称は略した。

Ⅰ 主題書誌解説

はじめに、本稿を作製するに際して参照した書目を掲げておく。

- 1 天野敏太郎/深井人詩「最近の書誌図書館関係文献」『日本古書通信』19-2(1954年2月)より毎号。1967年5月以降は同タイトルで深井が担当。1983年3月現在343回連載。なお、天野は戦前にも同誌(1940年2月～1941年10月)および『読書と文献』(1941年12月～1944年5月)誌上で同タイトルの連載をしている。
- 2 国立国会図書館参考書誌部編『人物文献索引』全3冊。人文編(1967年8月刊)は1964年までに発表された戦後の人物書誌索引。日本人約8000点(3800余名)、欧米人約3500点(1500余名)を収録。経済・社会編(1969年3月刊)は明治以降1968年までの日本人約3600点(1700余名)、外国人約2900点(700余名)を収録。法律・政治編(1972年3月刊)は明治以降1971年までの刊行物を対象に、日本人約5500点、外国人約2170点、列伝約1510点を収録したもの。
- 3 経済資料協議会編『経済学二次文献総目録』有斐閣、1971年3月(viii, 103p.)。明治以降1970年3月までに同協議会所属23機関、国立国会図書館、総理府統計局など協力機関(個人を含む)が作製した二次文献383点を収録。1978年12月までの補遺は同協議会発行の『経済資料研究』12～14に所収。

- 4 鈴木英夫「レファレンス・ブックス 近代日本経済関係 2次文献(1)日本経済学史」『経済資料研究』1, 1969年3月(pp. 37-53)。明治以降の日本経済学史の参考文献を主題別に配列し解説を付したもの。(1)一般的書誌(2)資料集(3)通史(4)全集・伝記・年譜・著作目録(5)外国経済学導入史(6)日本資本主義論争(7)大学学部史に分類されている。同誌には10回にわたり、分野別[中小企業、貿易、経営史、沖縄の経済統計、労働組合・労働運動、公害、農業、経済史、海運]のレファレンスが掲載された。

- 5 麗沢大学図書館編『一般書誌・索引』改訂版、1978年6月(63p.)。1978年3月末までに出版された内外の書誌52点の解題と「収録年代別書誌一覧」など4つの表からなる。初版は1973年3月発行。

- 6 宮地見記夫「レファレンス・ブックス 近代日本経済関係 2次文献 経済学一般」『経済資料研究』13, 1978年10月(pp. 30-46)。経済学の一般的・総合的な参考図書144点を11に分類してコメントを付したもの。

- 7 深井人詩編『人物書誌索引』日外アソシエーツ、1979年3月(400p.)。／同編『主題書誌索引』1981年9月(xxxiv, 352p.)。前者は、1966年から1977年までに発表された個人書誌約8000点(人名項目約4200名)を収録。後者は、1966年から1980年までを対象に主題書誌11150点(項目数4890件)を収録。

- 8 国立国会図書館編『経済関係二次資料利用の手引き』1982年3月(55p.)。

つぎに、社会科学とりわけ経済学全般にわたる単行書目を列挙すれば以下のとおりである。

- 9 高橋誠一郎『古版西洋経済書解題』慶応出版社、1943年6月(8, 5, 715p.)。1935年3月以降『三田学会雑誌』に断続的に掲載した「古版経済書解題」がその前身。1581年から1845年までに出版された経済学の古典37点に詳細な解題を付したものの。
- 10 高橋誠一郎『西洋経済古書漫筆』好学社、1947年6月(4, 3, 251p.)。9が専門的であるのに対し、本書は入門者向けに書かれた古典解説。1929年10月から1931年4月に改造社版『経済学全集』の月報に連載したものと、1939年10月から1943年12月に日本評論社版『新経済学全集』の「経済往来」に掲載したものからなる。
- 11 新島繁『社会科学文献解題』(政治・経済篇)東峰書房、1949年1月(380p.)。ケネー、スミス、リカード、マルクス、

エンゲルス、カウツキー、レーニンらの著作71点の文献解題。巻末に「人名解説」つき。ほかに、哲学・教育篇と文学・芸術篇がある。翌50年8月には春秋社から再刊。

12 高島善哉監修・山田秀雄編『社会科学年表』同文館、1956年11月(23, 560p.)。社会科学上の重要な著作を網羅した年表形式の文献目録で、現在まで類書は出現していない。収録範囲は、経済学、法学、政治学、社会学は言うまでもなく、哲学、歴史学、教育学などを含み、文学や自然科学にまで及んでいる。前付には「参考文献」(pp. 14-23)が、巻末には「索引」(pp. 503-60)が付されている。収録文献の下限は1750年であるが、本書と形式を同じくし、西欧啓蒙思想、とりわけスコットランド啓蒙を中心とした年表として後掲17がある。

13 松田寛「本邦所蔵西欧経済学古典文献の総合的研究」『学術研究』[早稲田大]20, 1971年12月(pp. IV-65-80)。(1)「本邦における経済学の古典の調査および研究」と題する総合研究の経緯と作業手続の説明(2)整理・編集後に刊行予定の刊本のテストング・サンプリングからなる。

14 日本経済学会連合編『経済学の動向』上(東洋経済新報社、1974年11月)所収「社会・経済思想史」(pp. 223-304)。各章のタイトル、分担執筆著者、参考文献件数(同一ノンブルに複数の文献を含むものあり)は次のとおり。(1)総論、田村秀夫、82件、(2)ルネサンスから啓蒙まで、浜林正夫、97件、(3)古典学派、溝川喜一、37件、(4)初期社会主義と小市民的急進主義、永井義雄、42件、(5)マルクス、杉原四郎・重田晃一、73件、(6)マルクス主義、山口和男、51件、(7)歴史学派、住谷一彦、29件、(8)近代経済学、菱山泉、56件、(9)日本の経済学史、真実一男、21件。

15 天野敬太郎「書誌索引論考」日外アソシエーツ、1979年4月(611p.)。天野の喜寿にさいし既発表の論考53篇を選びまとめたもの。うち本稿と直接関連する論文として、「社会科学資料概説(要綱)」(pp. 393-408)と「経済学・人と文献」(pp. 419-27)がある。巻末には1978年10月までの分類別「著作目録」(pp. 543-80)が付されている。なお、古稀記念論文集『図書館学とその周辺』(巖南堂書店、1971年7月)には深井人詩「天野敬太郎教授著作目録」(pp. 1027-1127)があるが、これは1970年10月までの著作を発表年月日順に配列したもので、付録として50音順の「著作題名一覧」がつけられている。

16 平松系一郎『大正期経済関係翻訳書目録』(関西大学経済資料室目録シリーズ5)1981年7月(283p.)。1912年から1926年に出版された邦訳単行書の文献目録。発行年次順に並べ、各年の中を「経済」と「社会その他」の2部門に区分し、著者(ないし標目書名)のアルファベット順に配列。巻末に著者・訳者・分類三形式の索引つき。初出は、1979年10月から1980年10月まで『経済論集』に連載。

17 Hiroshi MIZUTA, *Annals of Social Sciences 1701-1800, A chronological bibliography for the comparative*

history of the Enlightenment, with special reference to the Scottish Enlightenment, March 1981 and March 1982 (182p.)。『調査と資料』73, 74にも所収。本稿48も見よ。

経済学史・社会思想史一般

18 城塚登「思想史研究の動向」『思想』401, 1957年11月(pp. 126-130)。

19 水田洋「西ヨーロッパ及びアメリカにおける思想史研究の動向」『思想』406, 1958年4月(pp. 109-120)。

18はヨーロッパ思想史、19は英、独、仏3国とアメリカにおける研究の流派と研究対象別の展望を与えたもの。

20 高島善哉・水田洋・平田清明『社会思想史概論』(岩波書店、1962年4月)巻末「参考文献」(pp. 41-61)。ルネサンス以降の社会思想史の定評ある通史的概説書巻末につけられた主題および人物の主要参考文献目録。人物については、主著、全集、文献目録、研究書の順に配列。研究書は主として概説書あるいは評価の確定している単行書で、収録文献の言語は英、仏、独と邦語。

21 宮崎犀一「最近の欧米における経済学史研究の動向」(1)(2)『政経論叢』[国学院大]12-3, 1964年3月(pp. 42-55)。13-4, 1965年3月(pp. 24-39)。17世紀イギリス価値論、J. スチュアート論、反リカード的世界の諸論点をめぐる1962-63年に公表された12論文のサーヴェイ。

22 「経済学史・社会思想史にかんする外国雑誌論文抄録」『経済学史学会年報』——以下「年報」と略記——3, 1965年より経年連載。経済学史学会の会員の分担執筆による、前年に発表された論文の解題。

23 石井信之「経済学史研究の方法的問題」(1)~(3)『青山経済論集』27-4, 1976年3月(pp. 71-99)。28-3, 1976年12月(pp. 65-83)。29-3, 1977年12月(pp. 76-87)。(1)(2)には「代表的通史文献による検討」、(3)には「学派、学者についての史的展望」という副題がそえてある。また31-3(pp. 73-100)にも同タイトルの論文があり、34-3(pp. 24-49)には「経済思想史と経済学説史——通史方法論の検討」が掲載されている。

24 永井義雄「イギリス思想史の資料から——草稿の所在を中心に」『社会思想史研究』4, 1979年9月(pp. 159-67)。

ルネサンス

25 藤沢道郎「ルネサンスにかんする日本語の文献」『人文科学研究』[桃山学院大]9-1, 1973年11月(pp. 83-110)。戦後刊行された単行本および単行書収録の著述の目録。ルネサンス期の著述の翻訳と研究書およびその翻訳(8項目に分類)とからなる。ルネサンスの時代範囲は14~16世紀。地域はドイツより西のヨーロッパに限定。

26 小野二郎「ルネサンス研究関係の翻訳書」(1)(2)『翻訳の世界』3-5, 1978年5月(pp. 128-30)。3-6, 1978年6月(pp. 137-39)。目次——最近の訳書群展望、ルネサンスにおける

ネオ・プラトニズムの再評価, ルネサンスと神秘主義, レオナルドと人文主義, フィッチノの評価,

ユートピア思想

27 縫田清二「ユートピアの文献目録」『未来研究』2-7, 1970年7月(pp. 71-74). 未来学をも含むユートピア関係の内外の書誌の解説.

28 香内信子「日本のユートピア文献解題」ユートピアの会編『日本ユートピア学事始』河出書房新社, 1973年12月(pp. 278-307). 解題と文献リストからなる. 後者は1868年から1972年までの単行本・雑誌論文あわせて350点を刊行年代順に配列.

29 縫田清二「ユートピア思想」『年報』12, 1974年11月(pp. 1-13). 戦後の日本におけるユートピア思想の動向を3期に区分. 第1期(1946-57年), 第2期(1958-67年), 第3期(1968-74年)のうち, 第2期は次の5つに分類. トマス・モア研究, ユートピア論, ユートピア共同体, モノグラフィ, 日本のユートピア.

重商主義

重商主義解釈史の動向として戦前に次の2論稿がある.

30 小林昇「重商主義の解釈に就いて」『商学論集』〔福島大〕13-1・2, 1942年1月. 『小林昇経済学史著作集』3, 未来社, 1976年6月(pp. 323-60).

31 矢口孝次郎「重商主義概念解釈史の概要」『イギリス政治経済史——初期王政と重商主義』同文館, 1942年12月(pp. 125-64).

32 杉山忠平「重商主義」『年報』2, 1964年11月(pp. 1-13). 主として1961年後半から1964年前半までを対象とする研究動向. (1)重商主義一般を論じたものと, (2)個別研究をイギリス, フランス, ドイツ, ロシアと国別にサーヴェイしたものとの2部構成. イギリスでは, Petty, Locke, Child, Wood, Mandeville, Defoe, Hume, Steuartらの研究に言及. 収録文献件数54点.

33 高木暢也・中村広治「貨幣・信用学説史の研究」『年報』4, 1966年11月(pp. 18-26). 内容と収録件数は以下のとおり. (1)重商主義貨幣・信用学説およびそれ以前(24点)(2)古典学派 (i)Smith (ii)Smith から Ricardo への過渡期 (iii)Ricardo と地金論争(66点) (3)通貨論争とその周辺(30点).

34 浜林正夫「啓蒙期の社会思想」『年報』12, 1974年11月(pp. 13-22). 17・8世紀のイギリスとフランスの社会思想のうち, 1974年までの10年間に公表された著書・論文のサーヴェイ. イギリスについては, 主としてホブズ, ロック, ヒューム, スコットランド歴史学派が, またフランスについては, モンテスキュー, ディドロ, ルソーが主に採り上げられている.

35 中村広治・荒牧正憲「貨幣・信用学説史研究」『年報』20,

1982年11月(pp. 4-17). 高木・中村の学界展望〔→33〕以降1981年までを対象に「重商主義から地金論争まで〔付 初期社会主義〕」を中村が, 「通貨論争の研究」を荒牧が担当. 前者は(1)重商主義 (2)スミス (3)地金論争 (4)シスモンディ・初期社会主義に分類のうえ63点. 後者は(1)通貨主義と銀行主義 (2)ピール条例と通貨論争 (3)通貨論争の周辺 (4)信用理論の展開と通貨論争に分類し45点を検討.

イギリス革命

36 水田洋・川原和子「イギリス革命文献」『調査と資料』〔名古屋大〕32, 1966年6月(pp. 22-180). イギリス革命期前後(c. 1600-1700)の文献(ビブリオグラフィ, 単行図書, マイクロフィルム, Harleian Miscellany, Sommer Tracts)1588点と参照記入764点, 総計2352点にのぼる蔵書目録. 文部省科研費によって収集した資料に水田の個人蔵書を加えたもので, 当該関係資料のわが国最大のコレクション. 水田・川原・田畑雅庸編『名古屋大学経済学部所蔵イギリス革命文献目録』1963年10月(60p.)の増補改訂版.

37 浜林正夫「イギリス革命の思想構造」(未来社, 1966年11月)巻末「著作目録」(pp. ix-xxix). 分類項目と収録文献件数は次のとおり. — John Owen(72点), William Chillingworth(9点), James Harrington(24点), George Fox(4点), John Lilburne(108点), William Walwyn(19点), Richard Overton(20点).

1950年代半ば以降の10年間の海外の研究動向を概観したものととして次の2つの論稿がある.

38 今井宏「ピューリタン革命の政治史的研究」『史論』〔東京女子大〕17, 1967年3月(pp. 23-42).

39 松下京子「イギリス革命の地方史的研究」『史論』18, 1967年12月(pp. 51-66).

40 田村秀夫「イギリス・ユートウピアの原型」(中央大学出版部, 1968年6月)巻末「文献目録」(pp. ix-xxxiv). 内容は次の6項目よりなる. (1)Works of Gerrard Winstanly (2)Works connected with the Diggers (3)Newspapers and Reports on the Diggers (4)Collected Works, Selections and Reprints (5)Translations (6)Works on Winstanly and the Diggers. 収録文献総数174点.

41 浜林正夫「イギリス市民革命史」(増補版, 未来社, 1971年8月)巻末「文献目録」(pp. 14-67). 文献目録, 史料, 政治・軍事・外交史, 社会・経済史, 地方史, 思想史, 伝記・思想史個別研究の7つに分類された701点と「増補文献目録(1960-1969)」340点からなる. 補論「1960年代のイギリス革命史研究」(pp. 321-361)は, 初版(1959年12月)以降約10年間の内外の研究動向.

42 今井宏「明治日本とイギリス革命」研究社, 1974年7月(iv, 270p.). 福沢諭吉・徳富蘇峰・竹越与三郎・木下尚江・内村鑑三らによるイギリス市民革命論の導入と受容の過程をたどったもの. 第2章は, 福沢のイギリス革命像, 自由

民権運動とイギリス革命、明治前半期におけるイギリス革命の叙述に分けて、開国・自由民権期のイギリス革命観が描き出されている。

水田洋編『増補イギリス革命——思想史的研究』(御茶の水書房、1976年1月、初版は1958年12月)には、松浦の研究動向と水田の書誌的展望とが含まれる。

43 松浦高嶺「戦後日本におけるイギリス革命研究の歩み」(pp. 377-403)。戦後期を3段階に区分し、各段階ごとの全体的動向を概観。第1期は1945年から60年前後まで、第2期は60年代、第3期は70年代。必要に応じて海外の動向にも筆が及んでいる。

44 水田洋「総括にかえて——書誌的概観」(pp. 405-34)。研究史的な概観と思想史の資料の概要とに分けて論じられている。前者は注の中に豊富な文献を含む。後者は、法令・決議・その他の公文書、日記・回想録、パンフレットなど革命期当時の復刻版とトマスン(George Thomason)コレクションの内容解説。

45 今中比呂志『イギリス革命政治思想史研究』(御茶の水書房、1977年7月)巻末「文献目録」(pp. 333-47)。個別的文献資料および研究文献、一般文献資料、一般研究文献の3部構成。最初の部分は、バクスター(Richard Baxter, 1615-91)に関するものとシドニー(Algernon Sydney, 1622-83)に関するものとに分けて挙示されている。

スコットランド歴史学派

46 水田洋・川原和子「スコットランド歴史学派(モンボドとケイムズ)」『調査と資料』32、1966年6月(pp. 181-83)。James Burnett(Lord Monboddo, 1714-99)とHenry Home(Lord Kames, 1696-1782)の二人の著作と若干の研究書を公刊年代順に配列した文献目録。はじめ『経済学史学会関西部会通信』に水田によって発表された。

47 山崎怜「スコットランド歴史学派とその著作について」『研究年報』[香川大]9、1970年3月(pp. 1-67)。スコットランド歴史学派の群像、その著作と若干の問題、書誌の3項からなる。書誌は生年順に配列された43名の人物書誌で、各人物の著作・論文その他本人の業績と伝記を含む。採り上げられている人物は以下のとおり。F. Hutcheson, H. Home, W. Cullen, T. Reid, D. Hume, Sir J. Steuart, A. Ramsay, J. Burnett, R. Henry, H. Blair, W. Robertson, A. Carlyle, A. Smith, A. Ferguson, J. Gregory, J. Anderson, Sir J. Dalrymple, J. Hutton, Sir D. Dalrymple, J. Black, J. Moore, R. Watson, J. Millar, J. Beattie, J. Watt, J. Macpherson, J. Anderson, W. Smellie, T. Somerville, G. Stuart, H. Mackenzie, W. Thomson, A. F. Tytler, J. Logan, J. Gregory, D. Stewart, Sir J. Sinclair, D. Hume, J. Maitland, M. Laing, Sir J. Mackintosh, J. Dunbar, T. Robertson。

スコットランド研究にかんする水田洋個人の蔵書目録と

して次のものがある。これは17と同様名古屋大学の『調査と資料』73に所収の「スコットランド研究のための蔵書目録」(pp. 19-97)の別刷である。

48 Hiroshi MIZUTA(ex libris), *A Catalogue of a Private Collection for Scottish Studies*, March 1981 and March 1982 (77p.)。

フランス経済学史・社会思想史

49 桑原武夫編『フランス百科全集の研究(1751-1770)』(岩波書店、1954年6月)巻末「Bibliography」[邦語文献](pp. 38-51)。「Bibliography」は『百科全集』の諸版本、ディドロの著作、『百科全集』に関する主要参考文献の3部構成。「邦語文献」は翻訳と単行本・論文を含む研究文献とに分けてリスト・アップされている。

50 桑原武夫編『フランス革命の研究』(岩波書店、1959年12月)巻末文献目録(pp. 48-67)。2部構成で、前半の「Selected Bibliography」の内部は次の9項に分かれる。Documents, General history, Politics, Economy and Finance, Philosophy and Education, Religion, Culture, Persons, Periodicals。後半の「邦語文献」は原資料翻訳と研究文献(単行本、論文、邦訳書)とに分かれる。また、「フランス革命研究の動向と展望」と題する豊田堯の論稿(『西洋史学』86、1972年11月、pp. 24-44)もある。

51 渡辺輝雄・吉原泰助「重農学派」『年報』1、1963年11月(pp. 3-13)。狭田の研究動向[→113]のあとを受けて、1958年(『経済表』公刊200年)以降1963年7月頃までのサーヴェイ。「経済表の研究」を渡辺が、「重農主義研究一般」を吉原が分担。後者は重農主義経済学成立史研究、重農主義研究、重農主義継承者・批判者等の研究、フランス重商主義研究、その他の5部門に分けて検討されている。

52 平田清明『経済科学の創造』(岩波書店、1965年7月)巻末「文献目録」(pp. 11-30)。原典と本書前篇[アンジャン・レジームの危機とその超克]および後篇[『経済表』の解析]の参考文献との三部構成。ケネーを中心とする内外の文献を細分類し、著者名のアルファベット順に配列。

53 坂田太郎・津田内匠・浜林正夫・遅塚忠躬『フランス社会思想史文献目録』春秋社、1966年3月(17, 330p.)。小樽商科大学が所蔵する手塚寿郎(1895-1943)の蔵書目録。著者名のアルファベット順に配列された欧米文献4974点を収録。

54 野地洋行「フランス社会主義思想」『年報』5、1967年11月(pp. 20-26)。サン・シモン(Saint-Simon, 1760-1825)、フーリエ(F. M. Charles Fourier, 1772-1837)、バブーフ、ブルードンに関する1963年7月以降の論文のサーヴェイ。

55 坂田太郎・渡辺輝雄編『わが国における重農主義研究文献目録』勁草書房、1974年11月(92, 81p.)。主として1880年-1972年3月までの邦語文献を(1)翻訳 (2)著書 (3)論説に大別し、(1)(2)は発表年月順に配列。(3)はさらに明治期、

大正期, 昭和前期, 昭和後期(昭和21—30年), (31—35年), (36—40年), (41—47年)の7期に細分し筆者名のアルファベット順に配列。収録総件数723点, 英文目録と著者・編者・訳者名索引つき, 編者による「わが国における重農主義研究について」と題する学界展望を含む。杉原四郎の書評が『経済資料研究』10(1976年3月, pp. 51-56)にある(『近代日本経済思想文献抄』[→78]pp. 251-58に再録)。

56 岡田純一・太田一広編『フランス経済学史文献目録』(早稲田大学産業経営研究所 産研シリーズ7)1982年3月(vii, 132p.)。目次——(1)一般研究文献(2)コルベルティスムおよび関連文献(3)ネオ・メルカンティリズムおよび関連文献(4)F. ケネーおよびフィジオクラート(5)J. -B. セイ(6)J. -C. -L. シモンド・ド・シスモンディ(7)L. ワルラス。(1)は著者名のアルファベット順,(2)(3)(4)は総計34人の個人別リストを含み,(2)以下は原典, 翻訳, 研究文献の順に配列。研究文献は主として1945—80年の間に発表されたものを収録。ただし坂田・渡辺目録[→55]の対象と重複する部分は1972年—82年に発表されたものに限定。

57 太田一広・岡田純一「フランス経済学史」『年報』20, 1982年11月(pp. 18-34)。渡辺・吉原の研究動向[→51]以降, ほぼ1964年から1981年前後までの17年間の学界展望, 「重農学派とその周辺」を太田が, 「19世紀におけるフランス経済学」を岡田が担当。前者はColbertismeをめぐる諸問題, 重農学派, 重農学派の周辺の3つに分類のうえ97点。後者は, フランス古典派経済学, J. B. Sayの経済学, Simonde de Sismondiをめぐる, Léon Walrasと一般均衡論の4項目に分類し92点の論稿を解説。

アメリカ経済思想

58 白井厚・高哲男「アメリカ経済思想史」『年報』19, 1981年11月(pp. 2-17)。「南北戦争まで」を白井が, 「南北戦争から第1次大戦期まで」を高が担当。前者は経済学史の通史研究と, フランクリン, トマス・ペイン, ジェファソン, ハミルトンなどの人物別研究のサーヴェイ。後者は1967年以降1981年4月までを対象にして, 経済倫理と経済・社会思想, J. B. クラーク, 制度学派(ヴェブレン, コモンズ, ミッチェル), 制度学派とその周辺の4つに分けて検討されている。

古典派経済学

59 平瀬巳之吉・中村賢一郎「古典学派」『年報』1, 1963年11月(pp. 13-26)。1962年1月から1963年6月までに発表された著書(2点)と論文(54点)のサーヴェイ。著書を平瀬が, 論文を中村が分担。論文はスミスとその先駆者, 過渡期, リカードとマルサス, リカード周辺, J. S. ミルに分けて論じられている。

60 Keitaro AMANO, *Bibliography of the Classical Economics, vol. 4, Part 5 (Other British Economists)*,

Jan. 1964 (467-673p.) S. Bailey, J. Bentham, T. Chalmers, R. Jones, J. Maitland, M. Longfield, J. R. McCulloch, J. Mill, N. W. Senior, D. Stewart, T. Tooke, R. Torrens, E. G. Wakefield, Sir E. Westの14名の著作および研究文献目録。収録総件数3120点, 収録期間1770—1960年。

61 Keitaro AMANO, *Bibliography of the Classical Economics, vol. 5, Part 6 (General Description of the Classical Economics)*, Mar. 1964 (675-719p.)。テーマ別に14項目に分類し, それぞれ外国語文献, 邦語文献を著者名のアルファベット順に配列。収録総件数630点。収録期間1841—1960年。

62 羽鳥卓也「古典派蓄積論の形成と発展」『年報』4, 1966年11月(pp. 9-18)。「主として1963年後半以降66年前半期までに発表されたスミス, リカード, セー, マルサス, シスモンディ, J. S. ミルに関する論文35点をサーヴェイした学界展望。

63 真実一男・溝川喜一「日本経済思想史——古典派経済学のわが国への導入と展開」『年報』6, 1968年11月(pp. 16-23)。「古典派経済学導入史」を真実が, 「自由主義経済思想」を溝川が担当。前者ではスミス, マルサス, リカード, J. S. ミルの個別導入史と一般導入史, 後者では神田孝平, 福沢諭吉, 田口卯吉, 天野為之の学者別研究と全般的(巨視的)研究とに分けて42点が検討されている。

64 杉原四郎「古典派経済学と近代日本——わが国への古典派導入前史を中心として」同編『近代日本の経済思想』ミネルヴァ書房, 1971年2月(pp. 3-23)。大正9年(1920年)を境に前史と本史とに時期区分し, 古典派がいかに輸入され消化・発展せしめられたかを, 前史に限って述べたもの。前史はさらに次の3期に分けて考察されている。文久3年—明治21年(1863—1888), 明治21年—40年(1888—1907), 明治40年—大正9年(1907—1920)。初出論文は『経済論集』[関西大]13-4・5・6, 1965年3月(pp. 391-411)に所収。

65 福原行三「イギリス経済学史——リカードウからJ. S. ミルまで」『同(続)——スミスからリカードウまで』『経済研究』[大阪府立大]27-1, 1981年12月(pp. 1-34)。27-4, 1982年10月(pp. 1-19)。J. シュンペーター, K. マルクス, 藤塚知義, E. キャンン, E. セリグマン, R. L. ミーク, M. ブローグ, B. ゴードンらの分類ないし概観を参考にした著作目録。イギリス重農主義者, スミスの評注者・継承者・批判者, マルサス人口論批判, 地代論, リカード継承者, リカードの修正および批判的展開, 主観価値論の先駆, リカード派社会主義, 通貨・信用・景気論などの主題別文献が前稿の対象。続稿は, スミスの先駆者, スミス, イギリス重農主義者・過少消費論, スミスの評注者, スミスの継承者および批判者, 18世紀後半の土地公有論, 18世紀後半の人口論争, 救金法・雇用, リカードの目録。

古典学派については, ほかにも本稿14の(3)や人物書誌解説

の該当箇所も見よ。

初期社会主義

66 水田洋「初期社会主義」『年報』1, 1963年11月(pp. 26-35)。1962年1月から63年6月までを対象に、(1)フランスにおける Saint-Simon とサン・シモン主義者、Proudhon, Blanqui (2)イギリスにおける Owen, リカード派社会主義者(Hodgskin, Thompson, Bray) (3)ドイツにおける Heine およびサン・シモン主義者の研究を紹介。水田珠枝との共著『社会主義思想史』(社会思想社, 1971年4月)pp. 239-319に再録。

67 水田洋・川原和子「リカード派社会主義」『調査と資料』32, 1966年6月(pp. 184-96)。リカード派社会主義の内外の概説書6点のほか、John Francis Bray (1809-97), Thomas Rowe Edmonds (1803-89), John Gray (1799-1883), Charles Hall (1740?-1820?), Thomas Hodgskin (1787-1867), William Thompson (1775-1833)の6人の著作と研究書の目録。総計82点を収める。本稿の前身は、水田洋・安藤悦子「リカード派社会主義」『経済科学』8-1, 1960年3月。

68 木村正身「イギリス社会主義思想」『年報』5, 1967年11月(pp. 12-19)。水田の学界展望[→66]以後の初期社会主義関係の追加文献、革命的社會主義思想の断続問題、革命思想における人間と宗教、ブルジョア社会主義(福祉国家・土地社会主義)の4つに分けて日英の関連文献をサーヴェイしたもの。

69 鎌田武治「古典経済学と初期社会主義」(未来社, 1968年3月)巻末「参考文献目録」(pp. i-xv)。初期社会主義の原典・原資料、研究書、研究論文と人口論・古典経済学関係の原典・原資料、研究論文よりなる文献リスト。外国語文献と邦語文献に区別のうえ著者名のアルファベット順に配列。

70 平尾敏「リカード派社会主義の研究」ミネルヴァ書房, 1975年10月。ホジスキンのトムソン、グレイ、ブレイの4名を扱った論文集。各章の一節に「略伝と著作」が配され、それぞれの主要著作の解説が付されている。

71 都築忠七編『資料 イギリス初期社会主義』平凡社, 1975年11月(iii, 484p.)「オーエンとチャーティズム」というサブ・タイトルをもつ資料集。単行書からの抜粋・パンフレット・趣意書・新聞報道・個人の書翰などの邦訳。

ドイツ歴史学派

72 板垣与一「歴史学派の文献展望」『政治経済学の方法』(増補新版, 勁草書房, 1963年6月)pp. 345-405。目次——(1)総説—経済学における歴史意識 (2)歴史学派の生成 (3)歴史学派の成立 (4)歴史学派の形成。(2)では J. Möser, J. G. Fichte, A. H. Müller, (3)では F. List, (4)では W. Roscher, B. Hildebrand, K. Knies, G.

Schmoller, W. Sombart, M. Weber, F. von Gottl-Ottlilienfeld が採り上げられている。

73 小林昇「歴史学派」『年報』5, 1967年11月(pp. 1-6)。1955年頃からのカメラリスト, F. リスト, 新旧ドイツ歴史学派, その周辺の経済学者や農業学者らの研究文献58点のサーヴェイ論文。本稿14の(7)も見よ。

日本経済学史・経済思想史

74 藤原昭夫「明治前期における経済学史研究の発展」『千葉商大論叢』15-B, 1971年6月(pp. 154-74)。明治10年代および20年代初頭の阪谷芳郎, 井上辰九郎らの経済学史研究を概観したもの。副題に「日本における経済学史研究史(1)」とあるが、続稿は出ていない模様。

75 杉原四郎『西欧経済学と近代日本』未来社, 1972年3月(iv, 275, xvi p.)。西欧経済学の導入過程を軸とする近代日本経済思想史の研究(第1部), 明治時代の経済雑誌に関する文献的調査(第2部), 河上肇の人と思想に関する4論文(第3部)からなる。サブ・タイトルを略して目次を記せば以下のとおり。I (1)自由主義と歴史学派 (2)ロシアにおける J. S. ミル (3)L. コッサの導入と影響 (4)明治初期の経済学講義 II (1)明治時代の経済雑誌序説 (2)古典派経済学と『東京経済雑誌』 (3)明治20年代の経済雑誌 (4)同文館の『経済世界』 III (1)河上肇博士の労働観 (2)労働節約法則と『資本論』 (3)河上肇と古典派経済学。巻末に人名索引のほか、明治時代の経済雑誌索引を付す。

76 三橋猛雄編『明治前期思想史文献』明治堂書店, 1976年7月(30, 1056, 72p.)。

77 坂本武人・杉原四郎「日本経済思想史——『社会政策学会』と河上肇」『年報』17, 1979年11月(pp. 1-11)。「『社会政策学会』研究」を坂本が、「河上肇研究」を杉原が分担。前者は「社会政策学会」とその評価、先駆的研究、70年代における研究、『社会政策学会史料集成』の刊行、現時点における研究の意義、社会政策学会の性格規定、社会政策学会についての再評価、歴史的考察、小括からなる。後者は資料整備、思想家河上の研究、内田義彦の河上肇論、マルクス経済学者河上の研究からなる。

78 杉原四郎「近代日本経済思想文献抄」日本経済評論社, 1980年3月(II, 344, xvi p.)。文献考証に関するものを中心とする21本の論文と14本の書評・紹介とを集めた単行書。人物書誌解説でふれる予定のスミス, オウエン, J. S. ミルらの文献目録・文献解説・研究動向など[→136, 140, 176, 190, 195]のほか、重農主義やスミスの文献目録の書評[→55, 142]を含む。

79 杉原四郎「日本経済思想史論集」未来社, 1980年9月(395, xvi p.)。独立論文として書かれた18本の論稿を次の3部に分けてまとめたもの。第1部 導入史の諸相(5章と補論) 第2部 経済雑誌の変遷(3章) 第3部 河上肇研究(6章)。巻末に明治・大正期の経済雑誌の索引を付す。な

お、杉原の著作リストとして私家版『杉原四郎著作目録(1937年—1980年3月)』(41p.)がある。

80 大塚金之助『経済思想史(要領)』『大塚金之助著作集』2, 岩波書店, 1980年11月(pp. 296-331)。内容は次の3項からなる。日本における近代経済思想史(要綱), 輸入経済学の性質, 日本経済思想史に関する書目。最初『日本資本主義発達史講座』2, 岩波書店, 1933年6月(pp. 1-35)に発表された。わが国における書誌紹介の草分け的存在との評価が定着している。

81 杉原四郎「特定の思想家(日本人)を主題とする研究雑誌目録」『社会思想史研究』5, 1981年9月(pp. 198-207)。猪俣津南雄, 河上肇, 田中正造, 土田杏村, 山本宣治ら32人の思想家を対象とする研究雑誌の目録と解説。同誌6号には, 外国人を対象とする解説論稿が含まれている。

アイルランド研究

82 上野格「アイルランド問題」『年報』14, 1976年11月(pp. 1-11)。主として1970年代前半期にアイルランドおよび日本で発表された研究のサーヴェイ。アイルランドでの研究文献や当該研究の文献案内のほか, マルクス・エンゲルスとアイルランド, 重商主義・古典派とアイルランド, 経済的研究, アイルランド・ナショナリズム, 北アイルランド問題などに言及。なお, 上野にはほかにアイルランド関係文献32点を4つの問題に分けて検討した「明治・大正期のアイルランド問題研究文献について」と題する論稿(『エール(アイルランド研究)』4, 1975年11月, pp. 95-105)もある。

II 人物書誌解説

Sir Thomas More (1478—1535)

83 沢田昭夫「日本におけるトマス・モア研究——文献目録」(1)(2)“Nanzan Review”[南山大図書館]6, 1970年3月(pp. 48-65)。7, 1971年8月(pp. 51-70)。『ユートピア』の邦訳12点とモア関係の邦語研究文献305点を収録。邦語目録には翻訳を含めた研究書, 論文のほかモアに部分的に言及した一般図書も含まれる。収録下限は1971年6月。

社会思想史学会の年報『社会思想史研究』(ミネルヴァ書房, 第4号より北樹出版)の創刊号(1977年12月)は, モア生誕500年をひかえて次の3本の研究動向を掲げた。

84 沢田昭夫「戦後の欧米におけるモア研究」(pp. 146-59)。

85 田村秀夫「ソヴェトにおけるモア研究」(pp. 159-69)。

86 伊達功「日本におけるモア研究」(pp. 169-84)。

このうち, 84は戦後の単行書の動向を, 『ユートピア』研究, 根本資料・書誌資料, モア研究の傾向という3つの視角から概観したもの, 85はロシア革命期以後, 主として第2次大戦後のソヴェトにおける研究状況のサーヴェイ, 86

は『ユートピア』の邦訳と研究状況, 戦前の研究, 戦後(昭和20年代, 30年以降, 最近)の研究状況を概観したものである。

87 田村秀夫編『トマス・モア研究』(御茶の水書房, 1978年6月)の巻末「文献目録」(pp. 9-134)。イギリス思想研究叢書の第1巻, 以下の7項目に分かれる。(1)書誌・レファレンス文献 (2)モアの著作 (3)モアの著作集 (4)第1次資料 (5)モア研究文献 (6)『モレアナ』第1号〜第54号総目次 (7)邦語文献。(7)はさらに『ユートピア』の翻訳, モア研究文献, 『トマス・モア研究』第1号〜第8号目次に分かれる。本書第8章には, 伊達功「わが国におけるモア研究史」(pp. 243-59)が含まれる。

58 沢田昭夫・田村秀夫・P. ミルワード編『トマス・モアとその時代』(研究社, 1978年8月)の巻末「書誌」(pp. 33-49)。編者の一人沢田の手になるもの。内容分類がほどこされたうえで, 作品は著者名によって, 論文集は書名(雑誌名)によってアルファベット順に配列。

Michel de Montaigne (1533—92)

89 関根秀雄『モンテーニュとその時代』(白水社, 1976年3月)巻末「書誌」(pp. 51-66)。モンテーニュと16世紀後半の彼の時代に関する参考文献リスト。欧文文献目録は著者名のアルファベット順配列。邦語目録は翻訳, 研究書・評伝, 16世紀参考文献, 雑誌記事(収録期間1946—1974年)の4つに分類のうえ, それぞれ発表年次順に配列。

90 荒木昭太郎「日本におけるモンテーニュ関係文献大略・新編」関根秀雄・斎藤広信訳『永遠普遍の人モンテーニュ』(白水社, 1981年12月)巻末(pp. xxvii-xxxxi)。Pierre Michel の *Montaigne*, Ducros-Bordeaux 1969 の翻訳書巻末に付された目録。内容は(1)モンテーニュの作品の翻訳 (2)海外の研究書の翻訳 (3)邦語研究書 (4)邦語研究論文に分かれ, 配列は訳者・原著者・執筆者の50音順。収録期間は1927—1981年。

Thomas Hobbes (1588—1679)

91 高島善哉「ホッブズ文献目録」『一橋論叢』7-5, 1941年5月(pp. 96-108)。ホッブズの著作及びその独訳, 歴史的研究, 一般的(体系的)研究, 個別的研究の4つに分け, 研究文献については主として1850年以降の文献を著者名のアルファベット順に配列。

92 水田洋・川原和子「ホッブズの著作とかれにかんする文献」『調査と資料』32, 1966年6月(pp. 1—21)。内容は(1)ホッブズの著作 (2)同時代(c. 1650—c. 1800)のホッブズ批判 (3)ホッブズにかんする研究に分かれる。(1)は翻訳を含めた著作を主として出版年順に配列。(2)(3)は著者名のアルファベット順に配列してある。この目録は, はじめ水田の『近代人の形成』(1954年6月)の巻末に2部構成で掲載され, 同著再版(1964年)で増補されたものであるが, ここでは前半の「近代初期のヨーロッパ思想史(とくにイギリス)

にかんする文献抄」が削除され、後半がさらに増補されている。

なお『近代人の形成』の後篇第4章「ホッブズかいしゃくの一列」は、J. Lips, F. Tönnies, H. Cunow, F. Borkenauらドイツ社会民主主義者の研究動向である。また、『社会思想史研究』には各国別のホッブズ研究の動向3本が収録されている。

93 加藤喜代志「戦後イタリアにおけるホッブズ研究——ボッピオおよびカッターネオの所論を中心として」『研究』3, 1979年11月(pp. 151-61)。

94 三吉敏博「イギリス、ドイツのホッブズ研究」同上誌(pp. 162-69)。

95 高橋真司「明治初期日本におけるホッブズ哲学」『研究』4, 1979年〔1980年?〕9月(pp. 141-59)。

René Descartes (1596—1650)

96 森有正「デカルト文献」『哲学雑誌』705, 1950年3月(pp. 173-150)。内容目次は次のとおり。——I. Textes (1) Editions originales (2) Oeuvres de Descartes (3) Editions separees II. Etudes sur Descartes (1) Ouvrages generaux (2) Etudes biographiques (3) Science (4) Méthode (5) Métaphysique (6) Morale (7) Au Point de Vue de L'histoire Des Idees (8) Etudes Diverses。邦語文献(翻訳, 研究書, 研究論文)。補遺。

John Milton (1608—74)

97 宮西光雄「日本のミルトン文献表」『明治百年にわたる日本のミルトン研究』風間書房, 1971年5月(pp. 735-72)。英文学においてシェークスピアに次ぐ偉大な詩人とみなされるミルトンの, 1841年から1969年までの邦語文献735点を発表年月順に配列したもの。

98 平井正徳編『ミルトンとその時代』(研究社, 1974年12月)巻末「書誌」(pp. 14-35)。ミルトンの作品と研究書377点と、時代的背景を扱った研究文献59点を収める。研究書および研究文献の配列は、外国語、邦語とも編著者のアルファベット順に配列。

Gerrard Winstanley (1609—52)

99 田村秀夫「ウィンスタンリーとディガー運動——書誌的展望」『経済学論叢』〔中央大〕7-5, 1966年9月(pp. 57-100)。前半は田村の著書の巻末「文献目録」〔→40〕に再録。ただし、本稿の収録文献件数は149点であり、著書の目録は増補版である。後半は、戦前・戦後にわたる海外のウィンスタンリーとディガーズに関する「研究動向」(pp. 76-100)である。なお、田村の書誌(4)の8に掲げられている文献——*The Works of Gerrard Winstanley with an Appendix of Documents relating to the Digger Movement*, edited with an Introduction by George H. Sabine, New York 1941

(686p.)——の書評として、平実「ディガーズ運動の創始者ウィンスタンリー著作集」『経済学雑誌』〔大阪市立大〕26-6, 1952年6月(pp. 102-12)がある。本稿36, 40も見よ。

William Petty (1623—87)

100 松川七郎「ウィリアム・ベティ」(増補版, 岩波書店, 1967年12月)巻末「書目」(pp. 11-32)。ベティの著作, グラント(John Graunt, 1620—74)の著作, 参考文献の3部構成。ベティの著作は共和国時代までと王政復古以後とに分けて計65点を執筆年次順に配列。グラントの著作は3点, 参考文献は著者名のアルファベット順に配列。両者の著作の一部は本文中で詳しく解説されている。本書の前身は1958年および64年に一橋大学経済研究叢書の第10巻と14巻として2分冊で出版された。

また、J. M. ケインズの実弟 Geoffrey Keynesが編集したベティおよびグラントの公刊諸著作75篇の書誌——*A Bibliography of Sir William Petty F.R.S. and of Observations on the Bills of Mortality by John Graunt F.R.S. by Geoffrey Keynes Kt., Oxford 1971 (xiii, 103p.)*——の松川による書評が『商学論叢』14-5(1973年3月, pp. 65-73)にある。

John Locke (1632—1704)

101 浜林正夫「ロック文献目録」『一橋論叢』32-5, 1954年11月(pp. 174-79)。「J. ロック没250年記念号」の巻末に付されたもので、伝記、名誉革命にかんするもの、哲学・教育・宗教、政治・経済に分かれている。なお同号所収の鈴木秀勇「ジョン・ロック年譜」(pp. 145-73)は、死後出版物も含めたロックの著作リストをも兼ねている。

102 松下圭一『市民政治理論の形成』(岩波書店, 1959年6月)巻末「参考文献」(pp. 5-19)。海外の文献を(1)近代市民思想形成史 (2)イギリス市民政治思想形成史 (3)ロック研究に分類した参考図書リスト。

103 田中正司「ジョン・ロック研究の動向」『季刊 社会思想』1-2, 1971年8月(pp. 152-70)。1947年のラヴレース・コレクション公開以後の主として西欧の研究の分析・紹介。内容は以下の4項目に分かれる。新資料の公開とロック研究の流行、ロックの伝統的解釈と近代的解釈、認識論的研究の新傾向、日本の研究動向。『ジョン・ロック研究』〔→105〕に再録(pp. 354-82)。

104 平井俊彦『ロックにおける人間と社会』(増補第3刷, ミネルヴァ書房, 1974年3月)巻末「文献目録」(pp. 7-26)。内容は次の6項からなる。(1)ロックの著作と草稿 (2)ロックの書簡と伝記 (3)ロックについての研究・参考文献 (4)シャフツベリ(Shaftesbury, 1671—1713)の著作 (5)シャフツベリの書簡と伝記 (6)シャフツベリの研究・参考文献。(1)(4)は公刊年次順, (2)(5)は編著者名のアルファベット順, (3)(6)は項目別に分類のうえそれぞれが執筆者名のア

ルファベット順に配列されている。外国語文献のみ。本書初版は1964年2月発行。

105 田中正司『ジョン・ロック研究』(増補版, 未来社, 1975年4月)巻末「文献目録」(pp. i-xxvi)。内容は次の4つに分かれる。(1)ロックの著作と草稿 (2)ロックの伝記と書簡 (3)ロックについての研究・参考文献 (4)邦語研究文献。(1)は主要なものの公刊年次順, (2)は編著者のアルファベット順, (3)(4)はテーマ別分類がほどこされ(3)は著者のアルファベット順, (4)は著者の50音順に配列。収録期間の下限は1967年, (4)の上限は1950年(戦前の論文は補遺的に収録)。本書初版は1968年5月。本目録の前身は『横浜国立大学論叢』22-3・4, 1971年3月(pp. 80-118)。

106 田中正司・宮下輝雄『ジョン・ロック研究文献目録(1950—1979)』『邦語研究文献(1950—1979)』田中・平野耿編『ジョン・ロック研究』(御茶の水書房, 1980年10月)巻末(pp. 25-86)。イギリス思想研究叢書の第4巻。105を基礎とする増補版。前半は(1)主要公刊原資料／文献目録／伝記と書簡／伝記的研究 (2)医学研究／自然の科学／実体, 第1・第2性質論／認識論／哲学一般／言語論 (3)自然法思想／道徳・政治思想／所有論／経済論 (4)宗教・寛容論／教育論に分類。1978—79年分はAddendaとして別に収録。後半の邦語目録は, 単行本, 総記, 認識論・哲学一般, 自然法論・所有論, 政治一般, 経済論, 宗教, 教育, (補遺)に分類。

なお、『社会思想史研究』6(1982年9月, pp. 162-83)には, 友岡敏明による70年代以降の政治論についての研究展望が所収されている。

Daniel Defoe (1661?—1731)

107 天川潤次郎『デフォー研究』(未来社, 1966年3月)巻末「ダニエル・デフォー政治経済著作目録」(pp. 435-50)。主としてJ. R. Moore, *A Checklist of the Writings of Daniel Defoe*, 1962に依拠して547点にのぼるデフォーの著作のうち, 政治経済関係の単行本101点と定期刊行物15点の目録。そのうち天川が目を通したものには○印をつけ, 所在が示されている。なお, 山下幸夫『近代イギリスの経済思想』(岩波書店, 1968年6月)の巻末「参考文献」(pp. 17-28)には, 経済史関係の文献を中心に175点が収録されている。

Bernard Mandeville (1670—1733)

108 田中敏弘『マンデヴィルの社会・経済思想』(有斐閣, 1966年4月)巻末「文献目録」(pp. 1-6)。関西学院大学経済学研究叢書の第8巻。マンデヴィルの著作は本書の18-20ページに年代順に配列されている。巻末目録は, 欧米のマンデヴィル研究文献, 内外の一般的研究文献, 日本のマンデヴィル研究文献よりなる。

109 田中敏弘「最近のマンデヴィル研究について」『経済学論究』26-2, 1972年7月(pp. 47-66)。田中の著書〔→108〕が

出版された1966年以降約6年間の海外の研究史の概観。田中の区分によれば, この期間は, 1860年までの第1期, 1870年代からケイ(F. B. Kaye)の研究以前の第2期, ケイの研究と1924年のケイ版『蜂の寓話』公刊までの第3期に対して, それ以後の第4期にあたる。ここで採り上げられているのは, I. Primer, G. S. Vichert, T. Edwards, A. F. Chalk, M. M. Goldsmith, W. Euchner, P. Harthの7人の研究である。

110 田中敏弘「マンデヴィル研究の動向」『季刊 社会思想』3-1, 1973年4月(pp. 160-70)。1870年代から1924年のケイ版結実までと, ケイ版以降1960年代後半までの2期に分けて海外における研究を概観したもの。なお、『社会思想史研究』の創刊号(pp. 221-27)には, 水田洋の「マンドヴィル研究の現状」が所収されている。

George Barkeley (1685—1753)

111 名越悦『パークリ研究』(刀江書院, 1965年3月)巻末の参考文献(pp. 535-41)。パークリの著作文献25点, 参考文献(欧文献のみ)58点, その他の参考文献13点を収録。

112 戒田郁夫「経済思想家としてのジョージ・パークリ」(1)~(3)『経済集』[関西大]18-3, 1968年8月(pp. 61-84), 21-1, 1971年4月(pp. 73-97), 21-2, 1971年6月(pp. 31-49)。3本の連続論文のうち, (1)には「その人と時代的背景」, (2)には「パークリの経済書をめぐって」, (3)には「戦前・戦後におけるパークリ研究史」というサブ・タイトルがついている。

François Quesnay (1694—1774)

113 狭田喜義「ケネー研究の発展」『経済評論』1958年12月(pp. 30-37)。「1958年経済学の回顧と展望」を各分野別に検討した臨時増刊号に所収の論稿。ケネー経済学の体系, 『経済表』の分析, 現代理論への関連, ケネーに即しての4節からなる研究動向。

ケネーについては, ほかに本稿の51, 52, 56, 57を見よ。とくに岡田・太田編の文献目録〔→56〕には, pp. 43-66において, ケネーの主要原典54点, 内外の翻訳19点, 外国語研究文献171点, 邦語研究文献32点が収録されている。

Voltaire [François Marie Arouet] (1694—1778)

114 清水康子・中川久定・中川信編「ルソー, ヴォルテール文献目録」『思想』648, 1978年6月(pp. 1-14)。主として第2次大戦後1977年までに欧米で刊行された文献を, (1)綜括的研究 (2)ルソー (3)ヴォルテールに分類し, (1)を中川久定 (2)を清水 (3)を中川信が分担。(1)はルソー・ヴォルテールの時代／ルソー, ヴォルテールおよび18世紀に関する専門研究誌に, (2)(3)は著作／文献目録／伝記／総合的研究／個別的研究に分類され, 各ジャンルごとに簡単な解説

がつけられている。

115 清水康子「ルソーとヴォルテール」同上誌(pp. 233-56). 1950年代後半からの過去20年間の欧米の研究を、版本、生活と人間像、総合、思想、文学、影響と世界への浸透、その他の7分野から展望を与えた学界動向。

116 木崎喜代治「日本におけるルソーおよびヴォルテール関係文献目録」『思想』649, 1978年7月(pp. 1-42). ルソーの部とヴォルテールの部とに分け、それぞれを著作邦訳目録と研究文献目録とに分類。ともに公表年月順に配列。文献末尾にはページ数が記されており、現物との照合が終わっていないものには*印が付されている。研究文献のうち単行本および雑誌特集号はゴチック体で表記。『思想』661, 1979年7月に「補遺」あり。

Benjamin Franklin (1706—90)

117 久保芳和『フランクリン研究』(関書院, 1957年2月)巻末「ビブリオグラフィー」(pp. 1-21)関西学院大学経済学双書の第2巻。Collected Works, Uncollected Works, Franklin's Writings, Works relating to Franklinの4つに内容分類された目録。最後の研究文献目録は、著者名のアルファベット順に配列された外国語文献と出版年次順に配列された邦語文献を含む。本稿58も見よ。

David Hume (1711—76)

118 田中敏弘『社会科学者としてのヒューム』(未来社, 1971年6月)巻末「ヒューム主要著作リスト」(pp. ix-xiv). 著書その他、書簡集、著作集に分けて、発刊年次順に配列された著作目録。

119 山崎怜「ヒューム研究——その社会科学像をめぐる」『季刊 社会思想』2-2, 1972年7月(pp. 182-97). 認識論、道徳哲学(倫理学)、経済学など戦前のわが国における個別領域研究と、内田義彦、小林昇、田中敏弘、大野精三郎らに代表される戦後の社会科学領域の総合的研究との動向。

120 大野精三郎「ヒュームの生涯と著作」『歴史家ヒュームとその社会哲学』岩波書店, 1977年1月(pp. 17-31). 一橋大学経済研究叢書の第29巻。ヒューム理解の予備的前提として、かれの著作の相互関連を問うた論稿。『自伝』と著作、『人性論』の再発見とヒュームの体系的理解のはじまりの2節からなる。また本書の序論「研究史的展望と問題の提起」(pp. 1-16)は、ヒューム研究の史的概観、ヒューム研究の現段階と問題、ヒューム研究の新潮流などの内容を含む研究動向。

Jean-Jacques Rousseau (1712—78)

121 酒井三郎『ジャン-ジャック ルソーの史学史的研究』(山川出版社, 1960年3月)巻末「ルソー関係文献目録(1756—1955)」(pp. 1-136). 1756年から1955年までに出版された

欧文文献を発行年代順に並べ、各年次内を著者名のアルファベット順に配列した目録。

122 加園武「ルソー邦語文献目録」『社会学論叢』(日本大)25, 1962年12月(pp. 36-55). 慶応4年から昭和37年(1962)までの翻訳を含む邦語目録。総記、哲学・倫理・宗教思想、政治・経済・社会思想、歴史、教育思想、文学、音楽の7つのテーマに分類。

123 桑原武夫編『ルソー研究』(第2版)岩波書店, 1968年12月。「ルソー全著作要約」48点を本文末(pp. 369-423)に、「ルソー著作目録」「参考文献」「邦語文献」を巻末(pp. 27-43)に収録。本書初版は1951年6月刊行。

なお、ルソーについては、ヴォルテールの箇所であつた3文献[→114~116]をも見よ。

Sir James Denham Stuart (1713—80)

124 川島信義『ステュアート研究』(未来社, 1972年2月)巻末「文献目録」(pp. viii-xviii). ステュアートの著作は発刊年次順に配列し18点を収録。研究文献(伝記を含む)は、外国語と邦語の文献が区別され、ともに著者のアルファベット順に配列。邦語文献は研究書・研究論文あわせて75点を収録。

125 小林昇「マルクスまでのステュアート」『商学論集』(福島大)350-1, 1981年7月(pp. 31-86). 主著『経済学原理』(1767)の英・仏・独諸版の確認と、それが各国でどの程度浸透したのかを検索したユニークな「文献史的スケッチ」[副題]。本稿21, 32も見よ。

Denis Diderot (1713—84)

126 大賀正喜「最近のディドロ研究」『思想』390, 1956年12月(pp. 118-27). 新村猛の「ディドロ研究の近況」(『思想』283, 1948年1月, pp. 59-65)のあとを受けて、戦前のディドロ研究、著作の刊行、第2次大戦後のディドロ研究、日本におけるディドロ研究の4つにわけて概観したもの。

127 中川久定「ディドロの「セネカ論」」(岩波書店, 1980年7月)所収「引用文献表」(pp. 553-62). 資料と研究文献にわけ、前者はディドロの著作、定期刊行物、その他の著作(書簡・回想録・翻訳を含む)の3部、後者は論文、単行本の2部に分類。収録総件数172点。本稿49も見よ。

Joseph Massie (d. 1784)

128 三上隆三「近代利子論の成立」(未来社, 1969年3月)巻末「ジョーゼフ・マッシーの書目」(pp. 1-41). (1)ジョーゼフ・マッシーの著作 (2)ジョーゼフ・マッシーの著作であるといわれているもの (3)ジョーゼフ・マッシーに関する文献の3部構成。(1)(2)はあわせて43点の文献を、それぞれ刊行年次順に配列し詳細な解題が付されている。(3)は内外の研究文献を刊行年次順に配列し、マッシーを一般的に取り扱っているものを除いて文献末にマッシーのどの文献

を取り上げているかを指示してある。本書目の前身は、配列が若干異なるが、「ジョゼフ・マッシーの著作・文献の目録・解題」と題して『経済理論』[和歌山大]の94(1966年11月, pp. 21-57), 95(1967年1月, pp. 55-85)に発表された。

Adam Smith (1723-90)

129 Tadao YANAIHARA, *A full and detailed Catalogue of Books which belonged to Adam Smith now in the possession of the Faculty of Economics, University of Tokyo*, Tokyo 1951. Rep., New York 1966 (viii, 126 p.). 東大経済学部所蔵のアダム・スミス文庫目録。詳しくは次の3稿を見よ。矢内原忠雄「東大経済学部所蔵アダム・スミス蔵書について」『アダム・スミスの味』[→131](pp. 195-214)。杉原四郎「わが国にある外国人経済学者の文庫」『経済資料研究』1, 1969年3月(pp. 6-16)。大河内暁男「アダム・スミス文庫新収蔵書について」『経済学論集』[東京大]42-4, 1976年12月(p. 104)。

130 Keitaro AMANO, *Bibliography of the Classical Economics, vol. 1, Part 1*, Feb. 1961.(pp. 1-132). Works by Smith と Works about Smith とに大別され、前者は3つ後者は24に内容分類されている。研究文献のそれぞれの項目内は、外国語・邦語の順に各々著者名のアルファベット順に配列。収録総件数1850点。収録期間1759-1960年。本目録の前身は、「アダム・スミス文庫目録」(1)(2)『経済論集』[関西大]10-1, 1960年7月(pp. 61-112)。10-2, 1960年9月(pp. 86-142)。本稿60, 61, 161, 182, 192とともに、1980年2月に巖南堂書店から覆刻版が出た。

131 大河内一男・田添京二「日本におけるアダム・スミス研究の諸段階」アダム・スミスの会/大河内一男編『アダム・スミスの味』東京大学出版会, 1965年6月(pp. 65-110)。『本邦アダム・スミス文献』の旧版[→142]に付すべく用意した外国読者向け英文解題の草稿に手を加えたもの。旧文献目録が対象とした1952年までの約100年間のスミス研究史を次の4段階に分け、その特徴を抽出。第1段階(幕末から1909年まで)第2段階(1909年から1923年)第3段階(1923年から1940年)第4段階(1940年から1952年)。

132 金子ハルオ「生産的労働論争の批判的総括」『生産的労働と国民所得』日本評論社, 1966年10月(pp. 127-52)。『古典的な生産的労働論』をめぐる諸研究を含む4つの章からなる研究動向。稿末に各章の参考文献一覧表が掲げている。初出は1964年4月に『資本論講座』3(青木書店, pp. 99-129)に発表。

133 Hiroshi MIZUTA, *Adam Smith's Library. A Supplement to Bonar's Catalogue with a Checklist of the whole Library*, Cambridge 1967(xx, 153p.). ボナー目録(James Bonar, *A Catalogue of the Library of Adam Smith*, London-New York 1894. 2nd ed., 1932)の増補改訂版。本書に対する小林昇の書評は、『経済学史評論』(未来

社, 1971年10月)pp. 131-55に所収。スミス蔵書全体についての水田自身の詳細な訪英期間の調査報告として同タイトルの次の2稿がある。「アダム・スミスの蔵書」『アダム・スミスの味』pp. 215-303。『経済学論集』40-3, 1974年10月, pp. 74-80。

134 水田洋「アダム・スミス研究」(未来社, 1968年10月)巻末「アダム・スミス書誌」(pp. 14-101)。著作、書誌、研究の3部構成。研究は、内外の文献を内容別分類をせず著者名のアルファベット順に配列。第1版第3刷(1972年11月)にはAddenda(pp. 102-11)が付けられている。本書所収の「補論2 スミス研究史のなかから」(pp. 331-424)は、日本および世界におけるスミス研究の展望。

135 山崎怜「アダム・スミス——ひとつの序章」杉原四郎編『近代日本の経済思想』ミネルヴァ書房, 1971年2月(pp. 115-72)。「近代化」100年に対応して、わが国へのスミス導入史を取り扱った論稿の前半(1920年からの本史に対する前史)部分。1863年-87年の第1期, 1888年-1906年の第2期, 1907年-19年の第3期に分けて論じられている。

136 杉原四郎「日本におけるアダム・スミス」『アダム・スミス研究文献解題』大河内一男編『国富論研究』3, 筑摩書房, 1972年12月(pp. 149-86, 239-61)。前稿は、戦前日本のスミス研究、マルクスのスミス研究、戦後のスミス研究の3部からなる学界動向。『近代日本経済思想文献抄』[→78](pp. 7-45)に再録。後者の内容は以下のとおり。(1)スミス文献の包括的な目録と抄録・学界展望などの概観(2)スミスの著述とスミス蔵書の解説(3)伝記的研究、思想史的研究、経済学的研究の紹介(4)1967年以降の日本のスミス研究動向。

137 松田寛「日本における、アダム・スミスの原典ならびにその他の諸版本」『季刊 社会思想』3-1, 1973年4月(pp. 201-24)。収録期間は1759-1900年。収録文献は6項目約140点。『アダム・スミスの味』[→131]所収の「アダム・スミス著書(主要版次)全国所在一覧」の増補改訂版。

138 川久保晃志「日本におけるアダム・スミス研究」同上誌(pp. 171-84)。内容は以下のとおり。1950年代前半期(内田義彦・水田洋・小林昇)の研究。50年代後半-60年代の研究状況(富塚良三・羽鳥卓也)の小林批判と和田重司・山崎怜の内田批判。1968年以降の『道徳感情論』研究の本格的復興とスコットランド歴史学派研究。戦後出発時点と現時点(1970年代初頭)における問題視角の変化。

139 大森郁夫「日本におけるスミス研究の動向」『週刊東洋経済』1976年2月(pp. 134-40)。戦時下の大道、高島、大河内の「市民社会」研究から、戦後第1期(昭和20年代)の内田、小林、水田の研究をへて第2期(執筆時まで)の問題別特徴を概観。稿末には引用文献・参考文献50件(93点)が掲げられている。

140 経済資料協議会編『経済資料研究』12, 1977年8月。2本のスミス研究動向、文献紹介、2本の『国富論』刊行200年

記念論文目録からなる特集号、(1)杉原四郎「日本のスミス研究」(pp. 3-12)は、『近代日本経済思想文献抄』[→78](pp. 58-70)に再録。(2)水田洋「海外のスミス研究」(pp. 13-23)。水田には他にも「スミス研究の動向と問題」と題する学界展望(『科学と思想』22, 1976年10月, pp. 119-30)がある。(3)杉本俊朗「アダム・スミス書誌解説」(pp. 25-36)。戦前の書誌も含めて内外のスミス関係書目26点の詳細な解題。図書館所蔵目録や記念展示会目録も含む。(4)平松系一郎「わが国における『国富論』刊行200年記念行事」(pp. 37-51)。(5)細川元雄「『国富論』刊行200年記念論文(外国)一覧」(pp. 52-54)。(4)(5)とも『経済資料研究』13, 1978年10月に補遺を掲載。

141 鈴木亮・天羽康夫「アダム・スミス研究の現状」『年報』15, 1977年11月(pp. 2-17)。スミス生誕250周年前後から『国富論』刊行200周年まで(1973-76年)を主な対象にして、(1)スミス研究の全般的状況(2)初期スミス研究(3)『国富論』研究という3分野からのサーヴェイ。(2)を天羽が、残りの部分を鈴木が分担執筆。

142 アダム・スミスの会編『本邦アダム・スミス文献——目録および解題』増訂版, 東京大学出版会, 1979年2月(ii, v, i, ix, 379, 11p.)。明治2年から昭和51年まで(1869-1976)の文献を発行年順に配列し、同じ暦年の内部を(1)単行本(翻訳を含む)(2)雑誌論文・新聞論評(3)学説史(原論, 財政学を含む)・論文集・辞典(4)文献目録・学記記事に分類。必要に応じて簡潔な註と備考を付す。堀経夫「明治初期の経済学文献に現われたアダム・スミス」, 三辺清一郎「国富論の邦訳について」の2篇の解説のほか、主要文献約50点の解題つき。巻末人名索引11頁。書評に杉原四郎「『本邦アダム・スミス文献』増訂版について」(初出: 1979年6月。『近代日本経済思想文献抄』[→78]pp. 71-82)がある。本書の初版は、1955年12月弘文堂刊(11, 227p.)。これにも杉原の書評「わが国のスミス研究史に関する覚え書——『本邦アダム・スミス文献』読後感」(『経済論集』6-4, 1956年7月, pp. 1-19)がある。

143 中川栄治「『アダム・スミスの価値尺度論』についての海外における諸研究」(1)~(6)『経済研究論集』[広島経済大]4-1, 1981年4月(pp. 119-54)。4-2, 1981年7月(pp. 91-111)。4-3, 1981年11月(pp. 105-29)。4-4, 1982年2月(pp. 135-53)。5-2, 1982年6月(pp. 109-37)。5-3, 1982年8月(pp. 99-128)。対象時期は(1)が19世紀末から1910年代まで、(2)~(4)はそれぞれ1920年代, 30年代, 40年代, (5)(6)は1950年代を扱っている。

このほかスミスの研究動向や著作目録については、本稿の33, 35, 59, 62, 65などを見よ。

Anne Robert Jacques Turgot (1727-81)

144 津田内匠「チュルゴの蔵書目録——フランス国立図書館所蔵の手稿による」全3冊, 一橋大学経済研究所資料調査

室, 1974-75年(xiii, xxxix, 979p.)。フランス国会図書館手稿部所蔵のチュルゴの蔵書目録手稿を基本とし、チュルゴの死後印刷された蔵書売立て目録およびチュルゴ自筆の2種類の製本控えを参考にして作成された目録。第3分冊末尾(pp. 921-79)には「Turgot(1727-1781)の蔵書」と題する解説が掲載されている。

なお、津田にはほかに研究動向として「近年におけるTurgot研究の動き」(『経済研究』6-3, 1955年7月, pp. 236-40)があり、また調査研究として「チュルゴの未発表資料」と題する連載(『経済研究』22-3, 1971年7月, pp. 210-27, 25-1, 1974年1月, pp. 50-67, 25-2, 1974年5月, pp. 133-161)がある。

Edmund Burke (1729-97)

145 中野好之「評伝パーク——アメリカ独立戦争の時代」(みすず書房, 1977年10月)巻末「参考文献一覧」(pp. 13-18)。著作集・書簡集・演説集、伝記、学説史的な参考書、パーク理論全般を分析した参考書、特殊領域に関する参考書の5つに分類、解説つき。邦訳「エドモンド・パーク著作集」(みすず書房)全4巻の内容は以下のごとし。(1)崇高と美の観念の起源/現代の不满の原因(2)アメリカ論/ブリュッセル演説(3)フランス革命論(4)フランス革命論以後。

Thomas Paine (1737-1809)

146 石井俊之「トマス・ペイン邦語文献抄」渋谷一郎監訳『理性の時代』泰流社[1982年2月](pp. 10-24)。ペインの*The Age of Reason*(全2巻, 1794-95)の翻訳書巻末につけられた文献目録。ペインの著作の翻訳、邦訳文献および邦語研究文献あわせて100点を挙示。収録期間の下限は1981年5月。索引として「出版年月日順排列」と「ペインの著作別等排列」を付す。研究動向については本稿58を見よ。

James Anderson (1739-1808)

147 加用信文「James Anderson 書誌」『農村研究』[東京農業大]30, 1969年12月(pp. 37-55)。内容は(1)Andersonの著作歴(2)Andersonの著作考証(3)Andersonの執筆論文と「James Andersonの著作リスト」からなる。リストの内部は、刊行書21点、刊行書以外の他の雑誌・刊行物への寄稿論文19点、彼が編集発行した*The Bee*誌(17点)と月刊誌*Recreations*(29点)での執筆論文に分かれる。

Arthur Young (1741-1820)

148 飯沼二郎「アーサー・ヤング書誌」『農業経済研究』23-3, 1951年12月(pp. 32-43)。G. D. Ameryの著作目録(*The Writings of Arthur Young, The Journal of the Royal Agricultural Society of England*, vol. 85, 1924, pp. 175-205)によりながら、ヤングの生涯を(1)修業期(2)完成期(3)老類期に分けて書誌的に展望したもの。

Jeremy Bentham (1748—1832)

149 塩尻公明訳『ベンサムとコールリッジ』(有斐閣, 1939年10月)「訳者序説」中の文献目録(pp. 129-64). J. S. ミルが *London and Westminster review* 誌に掲載した2つの論文 Bentham, 1838 および Coleridge, 1840 の翻訳書に付された目録で次の8つからなる。ミルの著作(25点とその邦訳), ミル研究単行書(32点), ミルの伝記・哲学・論理学・倫理学・心理学に関する文献(99点), ミルの社会思想・政治思想・経済学に関する文献(113点), ベンサムの著作(41点), ベンサムに関する主要文献(17点), コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772—1834) の著作(22点), コールリッジに関する主要文献(31点)。

150 山下重一「ベンサム, ミル, スペンサー邦訳書目録」『参考書誌研究』10, 1974年11月(pp. 29-35)。ベンサム, J. S. ミル, スペンサー (Herbert Spencer, 1820—1903) の3名のそれぞれの邦訳書14点, 65点, 40点を年代順に配列。原典と翻刻や参考文献のあるものについてはその旨記されている。

ベンサムの文献については, 天野目録[→60]の pp. 475-539も見よ。

William Godwin (1756—1836)

151 白井厚「ウィリアム・ゴドウィン研究文献」(1)~(4)『三田学会雑誌』52-10, 1959年10月(pp. 71-80)。53-1, 1960年1月(pp. 85-93)。53-6, 1960年6月(pp. 37-44)。53-12, 1960年12月(pp. 36-51)。主として戦後における海外のゴドウィン研究について批判的な紹介を試みたもの。(1)の pp. 71-75および(4)の p. 51には文献が挙示されている。(4)には「人口論争をめぐって」という副題が付けられており, この部分だけ『ウィリアム・ゴドウィン研究』[→154](pp. 156-84)に再録。

152 水田洋[・安藤悦子]「ウィリアム・ゴドウィン(1)——初期社会主義文献目録II」『経済科学』9-3, 1962年5月(pp. 1-10)。ゴドウィンの著作46点とその諸版およびフランス, ドイツでの翻訳とをそれぞれ年代順に配列した著作目録。各文献の末尾には日本における所在も示されている。

153 白井厚「日本におけるゴドウィン研究史」『三田学会雑誌』59-3, 1966年3月(pp. 72-84)。59-6, 1966年6月(pp. 101-13)。マルサスの紹介, 福田徳三, 河上肇, 土田杏村, 無政府主義思想史研究の5つに分けて戦前期日本の研究動向を概観したもの。第59巻3号の pp. 83-84に関係文献26点を挙示。

154 白井厚『ウィリアム・ゴドウィン研究』(増補版, 未来社, 1972年6月)巻末「文献目録」(pp. xiv-lxvi)。内容と収録点数は次のとおり。(1)ゴドウィンの著作(出版年順に配列された著書72点と諸版/手紙5点)(2)ゴドウィン研究文献(外国語文献260点, 邦語文献76点)(3)ウルスタンクラ

ーフト (Mary Wollstonecraft, 1759—97) の著作(17点)(4)ウルスタンクラーフト研究文献(外国語文献53点, 邦語文献12点)(5)シェリ (Percy Bysshe Shelley, 1792—1822) 研究文献(73点)。

また, 収録資料3379点に要約・解説を加えたポリン (Burton R. Pollin) 編の *Godwin Criticism, A Synoptic Bibliography*, Tronto 1967(46, 659p.) の書評として, 藤川正信・白井厚「パートン R. ポリン編『ゴドウィン論評書——総文献目録』」『三田学会雑誌』61-10, 1968年10月(pp. 96-104)がある。白井の執筆部分は前掲書 pp. 427-35に再録されている。

Alexander Hamilton (1757—1804)

155 田島恵児「アレクサンダー・ハミルトンに関する最近の研究について」『青山経済論集』9-4, 1958年3月(pp. 161-76)。前年のハミルトン生誕200年記念を契機にアメリカで発表された研究成果の紹介と, その後の研究への問題所在を明らかにしたもの。

ハミルトンについては, ほかに本稿58の該当箇所も見よ。

François-Nöel Babeuf (1760—97)

156 豊田堯「バブーフとその時代——フランス革命の研究」(創文社, 1958年6月)巻末「参考文献」(pp. 10-12)。バブーフおよびバブーフ主義関係の史料, 著書, 論文(和洋)の主要文献リスト。

157 柴田三千雄「バブーフの陰謀」(岩波書店, 1968年1月)巻末「史料」「参考文献」(pp. 10-20)。「史料」は陰謀関係の基本的史料とその他の関係史料との解説。「参考文献」は, フランス革命一般, サン=キュロット運動・ジャコバン主義, 共和第3年, 初期総裁政府, バブーフ主義, ネオ・バブーフ主義の6項目に分け, それぞれを発行年代順に配列。

Claude Henri de Rouvroy Saint-Simon (1760—1825)

158 坂本慶一「フランス産業革命思想の形成」(未来社, 1961年11月)巻末「文献」(pp. 1-5)。サン=シモンとサン=シモン派に関する海外の単行書文献目録。原典, 思想史, 研究書の3部に分け, 原典以外は著者名のアルファベット順に配列。

159 吉田静一「日本におけるサン・シモン」(1)(2)『サン・シモン復興——思想史の淵から』未来社, 1975年12月(pp. 182-211)。

Thomas Robert Malthus (1766—1834)

160 市原亮二「わが国のマルサス研究史——トーマス・ロバート・マルサス文献目録に寄せて」『経済論集』7-4, 1957年7月(pp. 62-97)。天野目録[→161]を契機として書かれた明治以降戦前期までのマルサス導入史研究。対象期間は

次の6期。(1)明治元年から22年まで(1868~89) (2)明治23年から日清戦争まで(1890~95) (3)明治29年から日露戦争まで(1896~1905) (4)明治39年から大正8年まで(1906~19) (5)大正9年から昭和8年まで(1920~33) (6)昭和9年から敗戦まで(1934~45)。

161 Keitaro AMANO, *Bibliography of the Classical Economics, vol. 1, Part 2* (Thomas Robert Malthus), Feb. 1961 (pp. 133-206). Works by Malthus と Works about Malthus に分け、それぞれを前者は3項目後者は12項目に分類。研究文献は、外国語・邦語の順にそれぞれ著者名のアルファベット順配列。収録総件数960点。収録期間1796—1960年。前身は「マルサス文献目録」『経済論集』7-6, 1957年9月 (pp. 45-98)。

人口学会研究叢書の第4巻として刊行された、南亮三郎・館稔編「マルサスと現代」(勤草書房, 1966年5月)には、次の2つの文献が含まれている。

162 大淵寛「日本におけるマルサス研究の歩み」(pp. 245-266)。

163 兼清弘之「日本のマルサス研究文献目録」(pp. 267-283)。

本書には「マルサス生誕200年記念」というサブ・タイトルが付いており、大淵の文献研究は、内容上マルサス人口論研究史とマルサス経済理論研究史の2つに分けて行われている。兼清の目録は、次の5項目に分類。マルサスの著書の翻訳、人口論研究、経済学研究論文、人口論・経済学に論及している著書、伝記その他。配列は最初のものが出版年次順、それ以外は著者名のアルファベット順。収録総件数307点。

Georg Wilhelm Friedrich Hegel (1770—1831)

164 上妻精「ヘーゲル著作刊行史」『実存主義』52, 1970年7月 (pp. 80-98)。内容は次の6項からなる。ヘーゲル生存中に公刊されたもの、ベルリン全集版、ヘーゲル復興、グロクナー版全集、哲学叢書版全集、新しいヘーゲル全集。

165 上妻精「ヘーゲル文献目録」『思想』555, 1970年9月 (pp. 1-112)。1969年までに日本および欧米各国(ドイツ、イギリス、アメリカ、フランス、ロシア、イタリア、その他)で公表されたヘーゲルに関する主要文献リスト。各国語に分けた内部を、ヘーゲル自身の著作とヘーゲル研究書とに大別。研究文献はさらに問題別分類をほどこし刊行年順に配列。『思想』563(1971年5月, pp. 1-11)には、補遺(増補目録・正誤表)が掲載されている。

166 上妻精「ヘーゲル哲学研究の動向——回顧と展望」『思想』563, 1971年5月 (pp. 109-29)。ドイツを中心にヘーゲル哲学を直接のテーマとして展開された研究や運動の背景・傾向・影響を検討した研究展望。内容は、ヘーゲル学派、ヘーゲル学派の分裂、新ヘーゲル主義、今日のヘーゲル哲

学研究の4つに分かれる。

167 細見英「新版『ヘーゲル復興』の動向」『年報』9, 1971年11月 (pp. 10-18)。ヘーゲル生誕200年(1970年)を記念する日本ならびに世界各国での行事と論集28点のレビュー。目次は以下のとおり。(1)ヘーゲル生誕200年——概観 (2) IHG, IHV と Hegel-Archiv (3)ヘーゲル研究の焦点 (4)ヘーゲル研究の課題。

168 上妻精「初期ヘーゲル研究の動向」『季刊 社会思想』2-1, 1972年5月 (pp. 239-92)。『精神現象学』成立に至る1807年までのヘーゲルの青年時代(イェナ時代まで)の学界動向。19世紀, 20世紀初頭, 第2次世界大戦後の3期に分け、大戦後70年代初頭までは次の3視角から整理・検討されている。(1)マルクス主義のおよび社会哲学的視角 (2)道徳哲学・神学的視角 (3)伝記的研究・文学的研究。

169 大井正「『ヘーゲル学派』」『季刊 社会思想』3-3・4, 1974年1月 (pp. 180-224)。ヘーゲル学派、ヘーゲル左派、ヘーゲル右派、シュトラウス(David Friedrich Strauss, 1808—74), パウアー(Bruno Bauer, 1809—82), フォイエルバッハ(Ludwig Feuerbach, 1804—72), シースコフスキー(August Cieszkowski, 1814—94), シュテイルナー(Max Stirner, 1806—56)の8項目よりなる文献解題。

170 神保敏明「雑誌文献目録〈ヘーゲルからマルクスへ〉I」『現代の理論』127, 1974年8月 (pp. 37-58)。1960年から1974年5月までの邦文雑誌論文の目録。単行書は省略されているが論文集の体裁をとったものは収録。配列は発表年月順。

171 上妻精「戦後ヨーロッパのヘーゲル研究——主に社会倫理を中心として」『社会思想史研究』5, 1981年9月 (pp. 173-97)。また同誌6号(1982年9月, pp. 213-24)には、藤原保信「イギリスにおけるヘーゲル研究の動向」が含まれている。

172 赤井正二・太田信二・勝木吐夢・照井日出喜「ヘーゲル研究紹介——70年代西ドイツの文献について」『唯物論研究』[汐文社]5, 1981年11月 (pp. 177-89)。(1)論理学 (2)政治—社会哲学 (3)芸術哲学に分け、(1)はさらに (i)論理学と遮蔽性 (ii)方法の問題に分かれる。(1)の(i)を太田(ii)を勝木が、(2)は赤井、(3)は照井が分担。

Robert Owen (1771—1858)

173 五島茂「ロバート・オウエン著作史」正・続、大阪商科大学経済研究会, 1932年4月 (xiii, 543, 16, 71p.) 1934年5月 (viii, 220, 18p.). 戦前の大著で、オウエンの著作史を5期に分けて考察した正篇と、「英国における著作の所在を中心として」というサブ・タイトルをもつ続篇とからなる。大阪商大研究叢書の第1巻および第3巻。覆刻版: 東洋書店, 1974年。

174 古賀秀男「ロバート・オウエン研究の新しい展開」『歴史学研究』282, 1963年11月 (pp. 30-35, 60)。サブ・タイトル

にあるように、永井義雄の著書『イギリス急進主義の研究』の紹介を兼ねて研究史の回顧と展望を試みたもの。

175 白井厚「ロバート・オウエン関係文献と研究の動向」『三田学会雑誌』57-9, 1964年9月(pp. 55-66)。内容上次の4項目に分かれる。内外の戦前・戦後のオウエン研究文献、主著と邦訳、永井の著書〔→174〕をめぐる研究動向、オウエンの階級性の理解をめぐる。

176 土方直史「日本におけるロバート・オウエン研究史——空想的性格の理解を中心として」『経済学論叢』〔中央大〕10-3・4, 1969年7月(pp. 321-85)。オウエン像をめぐる研究史を、研究の発展段階にはほぼ照応する次の4説に分類しサーヴェイした論稿。(1)「実行的社会主義者」説 (2)階級協調説 (3)プロレタリア説 (4)ブルジョア説とそれをめぐる諸研究。なお(1)に該当する時期の文献を補足するものに、杉原四郎「明治時代のオウエン研究」(初出: 1975年12月。『文献抄』〔→78〕pp. 117-21)がある。

177 飯田鼎「イギリス労働運動史上のロバート・オーエン——生誕200年を記念して」『年報』9, 1971年11月(pp. 1-10)。1820年代(第2期)を中心とするオウエンの思想と行動を探り、オウエン主義にも考察の筆をのぼすことにより彼の全体像を浮き彫りにしようとする論稿。同誌の pp. 23-27 には、都築忠七「オーエン研究資料に関する若干の考察」も含まれている。

178 今井義夫「ロバート・オーエンと現代——ロバート・オーエン生誕200年記念によせて」『工学院大学研究叢書』9, 1972年3月(pp. 1-113)。目次は以下のとおり。(1)ニュー・ラナーク, 1970年9月 (2)ロバート・オーエンと現代のイギリス (3)イギリスにおけるロバート・オーエン生誕200年記念 (4)ソ連の出版物におけるロバート・オーエン (5)日本におけるロバート・オーエン生誕200年記念。本文中に26葉の写真が、また論文末に「日本におけるロバート・オーエンの自筆文書」(pp. 109-13)がある。

179 白井厚「ロバート・オウエンと現代——生誕200年記念を中心に」『季刊 社会思想』2-2, 1972年7月(pp. 198-212)。内容は、英・米の60年代の研究、英・米・日本における記念行事、イギリスの記念論文集、日本の記念論文集、オウエンの現代的意義の5項からなる。『社会思想史論集』(長崎出版, 1978年4月, pp. 91-118)に再録。

180 白井厚「生誕200年以後のオウエン研究」『社会思想史研究』4, 1979年9月(pp. 125-41)。

ほかに、オウエン研究の動向として、白井の上掲論文でふれられている堀経夫や石田和秀の論稿などがある。また本稿66や68を、資料として71を見よ。

Samuel Taylor Coleridge (1772—1834)

コウルリッジの主著と研究文献については、戦前に塩尻の目録〔→149〕があるが、ほかに次の書誌がある。

181 岡本昌夫「日本コウルリッジ書誌」(1)(2)『人文研究』6

-7, 1955年8月(pp. 83-91)。7-4, 1956年5月(pp. 203-06)。(1)は明治4年から昭和10年まで(1871—1935)に出版された単行本87点の書目。(2)は筆者未見。

David Ricardo (1772—1823)

182 Keitaro AMANO, *Bibliography of the Classical Economics, vol. 2, Part 3 (David Ricardo)*, Jan. 1962(207-315p.). Works by Ricardo と Works about Ricardo に大別し、前者は3項目、後者は15項目に分類。配列は vol. 1 Part 1〔→130〕に順ずる。収録期間は1809—1960年。総件数1350点。初出は「リカードオ文献目録」『経済論集』8-6, 1959年2月(pp. 113-80)。覆刻版, 1980年2月。
183 真実一男「明治および大正前期におけるリカードウ導入史」『経済学年報』〔大阪市立大〕16, 1962年5月(pp. 63-168)。導入史の時期を前史(明治初年—大正9年, 1868—1920)と本史(前史以後の戦前期と戦後期)とに区分したうえで、導入の特異性、散発的導入、本格的導入への準備期という3点から前史の状況を概観したもの。

184 真実一男「大正後期より戦前までのリカードウ導入史」『経済学年報』22, 1965年6月(pp. 1-61)。前稿をうけて、リカードの一般的導入、特殊の導入、翻訳的導入に分け本史の戦前期を概観したもの。

185 中村広治「Ricardo 研究」『年報』10, 1972年11月(pp. 1-8)。羽鳥の学界展望〔→62〕以降すなわち1966年後半から1972年初頭までを主な対象期間とし、価値論、地代論、資本蓄積・一般的過剰論、リカード体系に分類のうえ25点をサーヴェイしたもの。

186 真実一男「日本におけるリカード導入史」『リカード経済学入門』新評論, 1975年5月(pp. 152-94)。前掲稿〔→183, 184〕を簡略化し、それに戦後の研究史をつけ加えた導入史研究。初出は杉原編『近代日本の経済思想』〔→64〕(pp. 173-212)。

なお、リカードについては、本稿の33, 35, 62, 65のほか、『リカード全集』10(雄松堂書店, 1970年8月)巻末「付録」(pp. 27-69)をも見よ。それは、リカードの著作書誌、手稿概観、備忘録、蔵書の解題である。

Jean Charles Léonard Simonde de Sismondi (1773—1842)

184 吉田静一「フランス古典経済学研究」(有斐閣, 1982年12月)巻末「文献目録」(pp. 279-90)。シスモンディの著作目録と研究文献目録からなる。後者は外国語と邦語の単行書および雑誌論文を含む。

Friedrich List (1789—1846)

185 小林昇「フリードリッヒ・リスト」『小林昇経済学史著作集』6, 未来社, 1978年6月(pp. 9-90)。とくにその「生涯と著作」の箇所は、(1)青年——アメリカ時代 (2)国民的体

系』まで (3)晩年の3期に分け、リストの著作解説にあてられている。初出・再録については、以下の論稿も含めて『著作集』巻末を見よ。

186 小林昇「東独のリスト」『著作集』8, 1979年6月(pp. 131-78)。戦後東ドイツのリスト研究とリスト論争(ゲーリヒ、フェビウンケ、リュレーラ)の概観とその批判。同『著作集』所収の『全集』以後のリスト研究(pp. 95-130)も批判的研究展望である。

187 小林昇「リスト文献とリスト文庫」『著作集』8(pp. 267-306)。リスト文献への手がかりとリスト文庫の内容との詳細な紹介。おもな内容は、リストの原典と研究文献とについての目録の紹介、リスト関係の内外の研究書、リスト協会のパンフレットの紹介、『リスト全集』中の重要な論説、リスト文庫の内容紹介など。

Richard Jones (1790—1855)

188 大野精三郎『ジョーンズの経済学』岩波書店, 1953年9月。一橋大学経済研究叢書の第3巻。第1部序説の第2章に「ジョーンズの生涯と著作」(pp. 43-56)が、また巻末には「ジョーンズ著作目録」(pp. 11-12)が含まれている。

また、天野目録〔→60〕の pp. 552-58を見よ。

Auguste Isidore Marie François Xavier Comte (1798—1857)

189 本田喜代治『コント研究——生涯と学説』(法政大学出版局, 1968年3月)巻末「文献」(pp. 1-10)。本田喜代治フランス社会思想研究の第2巻。コメント付きのコント著作リストと著者名のアルファベット順に配列されたコント研究文献からなる。初版は1935年、戦後46年に再刊。

John Stuart Mill (1803—76)

190 杉原四郎「戦後のわが国における J. S. ミル文献について」上・下、『経済論集』3-4, 1954年1月(pp. 82-100)。4-2, 1954年5月(pp. 103-21)。翻訳14点と研究文献66点を収録。後者は次の9項目に分かれる。一般的文献(伝記を含む)、哲学(論理学)、教育論、功利主義、社会問題、政治思想、婦人論、人口論、経済学。収録期間は1946—53年。各文献のあとに戦前のわが国の研究との関連や戦後の海外の研究動向についての解説つき。『文献抄』〔→78〕(pp. 125-59)に再録。

191 堀経夫「明治初期の思想に及ぼした J. S. ミルの影響」同編『ミル研究』未来社, 1960年9月(pp. 175-202)。ミルの功利論、政治論、経済論に関する邦訳書をつうじて、各方面にわたるミルのわが国思想界への影響を説いた論稿。初出は『経済学論究』10-4, 1957年1月(pp. 57-87)。

192 Keitaro AMANO, *Bibliography of the Classical Economics, vol. 3, Part 4 (John Stuart Mill)*, Jan. 1964 (317-466p.). Works by J. S. Mill と Works about J. S.

Mill に分け、前者はさらに4項目、後者は23項目に細分。配列は vol. 1, Part 1 に順ずる。収録期間は1822—1960年。総件数1900点。初出は「ジョン・ステュアート・ミル文献目録」『経済論集』6-7, 1956年11月(pp. 51-90)。覆刻版は1980年2月刊。

193 杉原四郎「ジョン・ステュアート・ミルと近代日本」『ミルとマルクス』増訂版, ミネルヴァ書房, 1967年5月(pp. 243-59)。明治維新以後の日本に及ぼしたミルの思想の影響を論じたもの。なお、杉原には James P. Scanlan, John Stuart Mill in Russia: A bibliography, *The Mill News Letter*, IV, 1, pp. 2-11 の紹介を兼ねて、ほぼ同時期に始まったロシアと日本の J. S. ミル導入史を対比した論稿「ロシアにおける J. S. ミル」〔→75〕(pp. 26-41)がある。

194 永井義雄「J. S. ミル——明治期についての試論」杉原編『近代日本の経済思想』〔→64〕(pp. 213-71)。明治のわが国へのミル経済学の導入史研究。時期区分と内容は次のとおり。(1)導入の初期——1877(明治10)年頃まで (2)スミス派から過渡期の理論家へ——1891(明治24)年まで (3)ミル評価の定着傾向——1899(明治32)年まで (4)経済研究の本格化のなかのミル——大正のはじめまで。

195 杉原四郎・福原行三「J. ミルおよび J. S. ミル」『年報』11, 1973年11月(pp. 1-10)。1960年以降に発表された日本のミル父子研究文献のサーヴェイ。倫理学、政治学、文芸評論、女性論など経済学以外の文献を杉原が、経済学関係を福原が分担。後者は、父ミル、一般的研究、方法論、人口論、農業問題、企業・企業者論、分配論、価値論、貨幣信用論、商業論・販路説、国際貿易論、動態論・蓄積論、財政論、社会主義論に分類のうえ検討されている。杉原の担当箇所は『文献抄』〔→78〕(pp. 172-78)に再録。

なお、J. ミルについては、本稿60を、また J. S. ミルについては、59, 62, 63, 65, 149, 150をも見よ。

(1983年4月26日)